

〈資料紹介〉名古屋城内における発掘調査出土の金薄板片について

村上 慶介・大西 健吾

キーワード

名古屋城 本丸 金薄板片 内堀 搦手馬出
出土資料 金鯢鱗 測色分析 厚み分析

はじめに

令和元年度の名古屋城調査研究センター発足以降、名古屋城の今後の整備・活用に向けた調査研究がより活発となっており、発掘調査成果の蓄積も著しい。本稿では、近年の発掘調査で出土した金薄板片を、既往調査成果の事例や発掘調査以外の所蔵資料との比較検討を行う。

1 発掘調査での金薄板片出土状況

(1) 本丸内堀発掘調査

天守閣整備事業に係る天守台周辺石垣及び内

堀の地下状況の確認のために行われた令和元年度・2年度の発掘調査で計5点の金薄板片が出土した（図1～3）。R区で現在の堀底から約30cm下の第二次世界大戦戦災前までの旧堀底面付近から1点、X区で戦後に形成された攪乱坑内から1点、Z区で現在の堀底から約50cm下の明治期頃の堀底と捉えている堆積土内から3点である。いずれも出土位置は大天守台下端から5m以内の範囲におさまり、大天守建物と近い位置であった。

(2) 本丸搦手馬出周辺石垣修復に伴う発掘調査
平成18年度の石垣解体調査において、東北隅櫓台の盛土内から金薄板片が1点出土した（図1・4）。出土層位は櫓台天端から約1.3m下の櫓台上半部の盛土にあたる。解体前の櫓台は

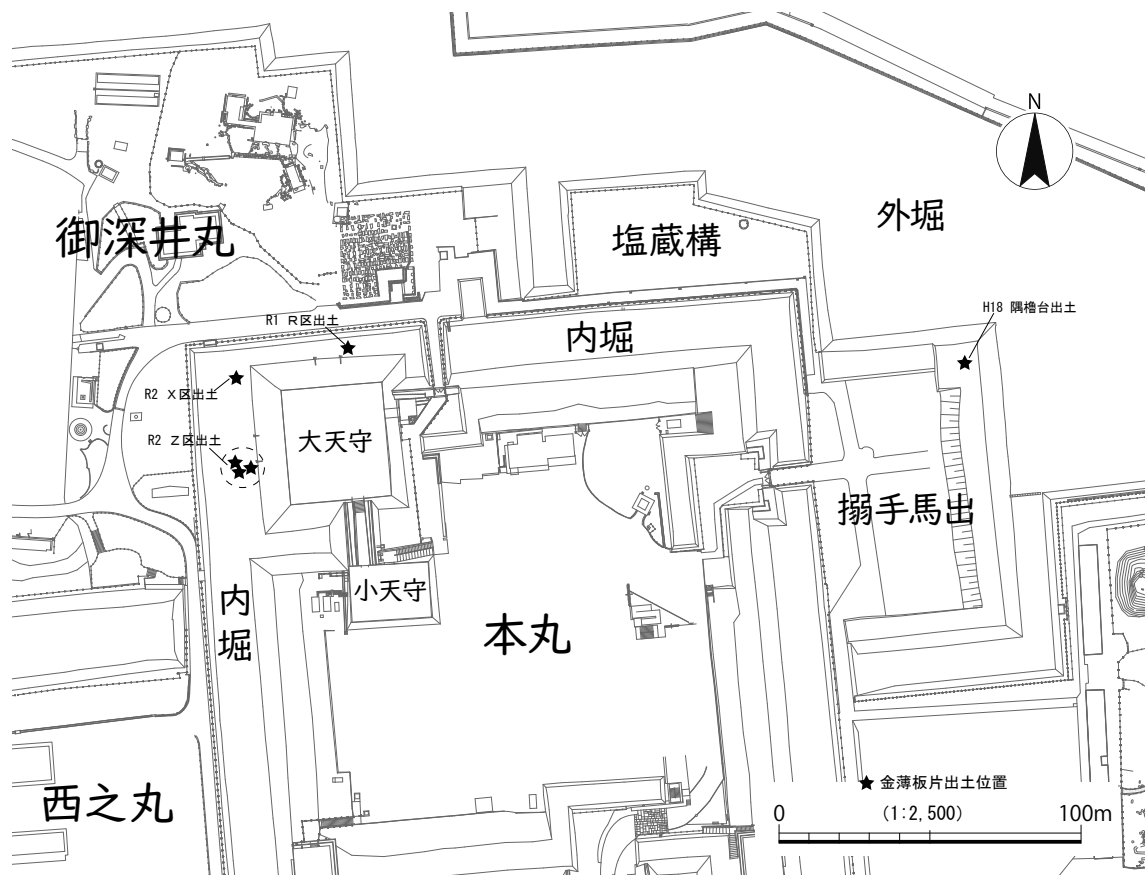


図1 名古屋城本丸金薄板片出土地点

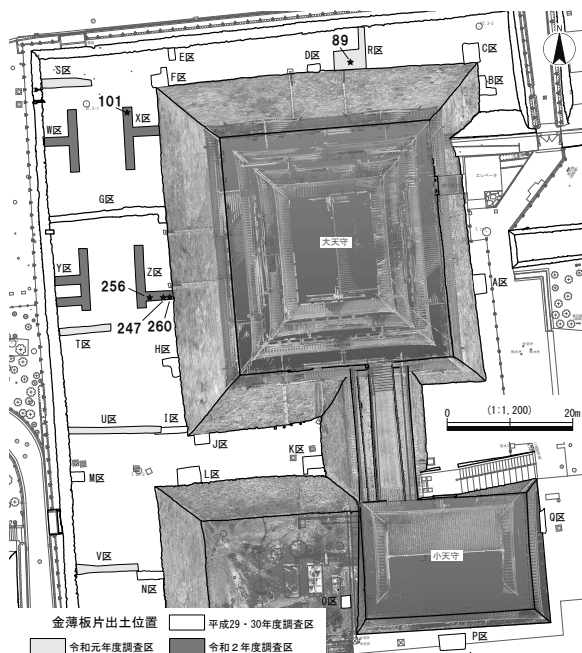


図2 内堀金薄板片出土位置図

築城当初のものではなく、記録に残る限りでは築城から約70年後の天和2年(1682)の搦手馬出石垣の大規模修復時に全体が再構築されたものと考えられる。それ以降にも修復が行われている可能性はあるが記録が残っていない。

2 出土金薄板片の主な特徴

『特別史跡名古屋城跡 本丸内堀発掘調査報告書(令和元年度・令和2年度)』(以下「報告書」という。)によると、内堀出土金薄板片(以下「内堀資料」という。)に蛍光X線分析を行い組成比が金60～67wt%、銀30～37wt%という、14～16金に相当する品位であると報告

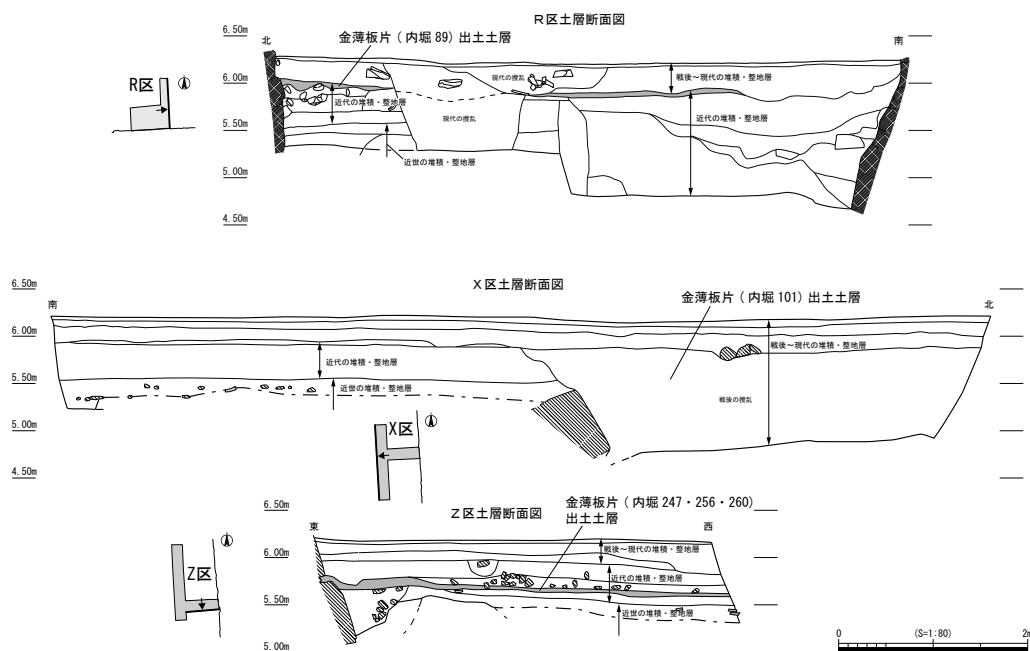


図3 内堀金薄板片出土調査区土層断面図

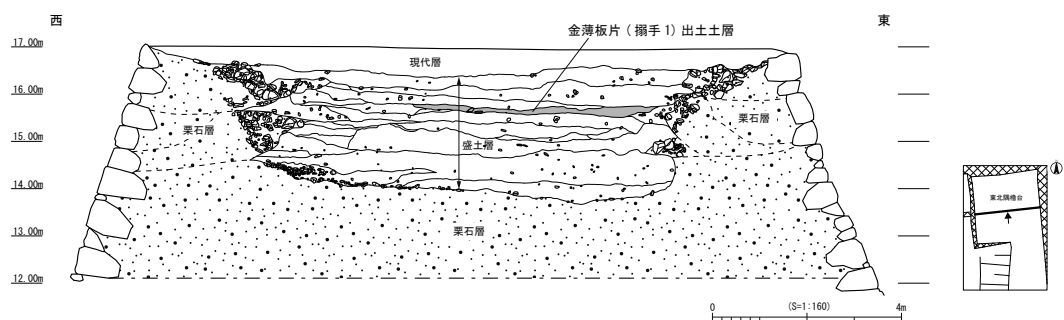


図4 搦手馬出東北隅櫓台土層断面図

表 1 内堀・搦手出土資料一覧

資料名	調査年度	出土地点	寸法(mm) 縦×横×厚	色調（左：SCE、右：SCI）							所見
				表/裏	L*		a*		b*		
内堀89	令和元	R区	34×10×3	表	77.23	77.03	4.82	4.76	37.24	37.05	やや扁平で縮 れている
				裏	77.52	77.93	-0.75	-0.82	29.73	29.60	
内堀101	令和2	X区	9×7×1								細片
内堀247	令和2	Z区	35×15×6	表	66.96	67.08	8.72	8.69	34.55	34.49	両端が捻じ曲 がる
				裏	86.92	87.81	-1.41	-1.43	27.52	27.70	
内堀256	令和2	Z区	30×23×17	表	77.29	77.77	8.10	8.11	39.20	39.33	折りたたまれ たような形状
				裏	89.91	87.79	0.67	0.63	34.18	33.28	
内堀260	令和2	Z区	15×10×2	表	72.99	73.19	8.16	8.13	33.65	33.52	片側が折れ曲 がる
				裏	88.30	90.70	-2.49	-2.58	25.94	26.56	
搦手1	平成18	搦手馬出 櫓台盛土	68×31×10	表	68.35	68.85	7.24	7.26	33.59	33.80	中央付近で捻 じれて潰れる
				裏	78.49	78.64	3.10	3.08	35.90	35.87	

* 内堀101の色調については、寸法が小さく分析機器の都合上正確な計測値を得られなかったため不記載とした

されている（二橋・大西ほか 2023）。また、大
天守から約 200m 東に位置する本丸搦手馬出の
東北櫓台盛土内から出土した金薄板片（以下「搦
手資料」という。）も、成分分析は行っていない
が、形状や色合いが酷似している。

いずれの資料もチューイングガムの包装紙を
くしゃくしゃにしたような形状である。また肉
眼観察において、金板の表面と裏面の光沢や赤
味、黄味が異なっていることが特徴といえる。
出土位置が距離的に離れてはいるものの、内堀・
搦手両資料は形状、色調とも共通している。資
料個々の詳細は表 1・口絵 2-4 のとおりである。

3 金鯰鱗との関係

現在の金鯰は戦後の再建天守閣とともに復元
されたものであり、江戸時代からの金鯰は終戦
間際の昭和 20 年（1945）5 月 14 日の空襲によ
り無慈悲にも灰燼に帰した。しかしその中で燃
え落ちた金鯰の鱗などは奇跡的に一部残存し、
戦後回収されていた。現在も約 20 点余りの資

料が城内に収蔵されており（以下「金鯰関連資
料」という。）、その焼き爛れた痕が戦火の惨状
を今に伝えている（口絵 2-1～4 参照）。この
ような金鯰の来歴の詳細については朝日の本書
記載論考を参照されたい（朝日 2025）。

金鯰鱗は、銅板を支持体として金板を鋳で止
める、あるいは銅板を折り曲げ金板を挟み込む
ことによって固定されている。これらの鱗が木
型に貼り付けられることによって金鯰を構成し
ている。ここで特筆すべきは、金鯰関連資料の
うち表裏が確認できる 13 号、15 号、17 号、
18-1～3 号、19-1 号、20 号、21-1 号といった
個体では内堀・搦手資料と同様に表裏の色合い
が異なり、それぞれの色合いが肉眼観察であっ
ても内堀・搦手資料と酷似している。金鯰が天
守閣や御殿など建造物における鍔金具で多く用
いられる鍍金ではなく金板を用いていること、
また屋外に懸けられていること、とりわけ内堀
資料はいずれも天守台ほぼ直下から出土してい
ることから、金鯰鱗の一部であった可能性は高

い。

朝日は論考の中で金鯢鱗を大きく3つの区分に分類しており、以下のとおり引用する（朝日2025）。

- ①空襲前に金鯢本体から脱落し、あるいは盗まれ、その後再収集された鱗断片およびその関係資料。被災していない。
- ②空襲で被災した後、天守周辺の焦土から拾い集められた鱗断片および金属塊。表裏ともに焼けただれた被災痕がある。
- ③近年の発掘により名古屋城内から出土した金色の破片。

本稿で紹介している資料は上述区分③に該当する。発掘調査成果によると、内堀 247、256、260 の3点は出土した明治期の堀底土の上を第二次世界大戦以前までに埋められた整地土に覆われていたこと、搦手1は近現代の遺物の入らない堅固な盛土内であったことから、以上の4点については確実に被災していない資料と判断できる。他の2点も含め被災痕跡が認められないことから、戦前に金鯢より剥離した資料であると推定される。

ただし搦手資料については、金鯢の一部であった場合、大天守から直線距離で200 m以上離れた地点から出土している。嚴重に管理されるべき金が人為的に運ばれ、埋没するのも不自然である。想像を逞しくするならば、光り物を集める習性を持つカラス等の野鳥が金鯢鱗を啄み剥がし、それを咥えて搦手馬出の方へ飛び立ったということも考えられる。あくまで憶測に過ぎないが、可能性のひとつとして挙げても差し支えないのではなかろうか。

4 測色分析結果による比較

名古屋市工業研究所の協力の下、内堀・搦手資料を含む金鯢関連資料の測色分析をする機会を得た（酒井2025）。分析結果や分析条件等の

詳細は上述別稿に委ね、本稿では一部結果を抽出した（表1）。

また、抽出した数値を元に散布図を作成し、横軸に a^* （赤味の強弱）数値、縦軸に b^* （黄味の強弱）数値を設定した（口絵3）。なお、 L^* （白味の強弱）数値は表を二次元グラフとして掲載するため、便宜上割愛した。なお、測色の数値は、拡散光を含まずより見かけの色に近い SCE 方式による値を採用した。

内堀資料、搦手資料の表裏を比較すると、 b^* （黄味の強弱）は類似するものの a^* （赤味の強弱）に違いが認められる（図5）。

次にこれら出土資料と金鯢関連資料のうち表裏を観察できる個体（13号、15号、17号、18-1～3号、19-1号、20号、21-1号）を抽出し、比較する（図6）。

抽出資料は、内堀・搦手資料に比べ表面は赤味・黄味ともやや弱い。裏面では、抽出資料の方が赤味が強い傾向にある。すなわち、抽出資料に比べ内堀・搦手資料の方が表裏の色差が明瞭であるといえる。しかし、表裏の差の大小はあるものの表面の方が裏面に比べ赤味が強いという共通点を見出すことができる。

5 金薄板の厚みによる比較

内堀・搦手資料を含む金鯢関連資料の厚みをマッピングで示すとともに、表裏が観察できる抽出資料と比較する（口絵5-1）。

内堀・搦手資料の厚み（内堀 89、内堀 247、内堀 256、内堀 260、搦手1）は、同一資料内でも計測値に斑があるが、0.05mm～0.1mm程度である。抽出資料（13号、17号、18-1～3号、20号）は0.05mm～0.15mmまで幅があるがおしなべて0.1mm程度の資料が多い。

内堀・搦手資料の方がやや薄い傾向がみられるものの、厚みに幅があることを考慮すると、両資料の厚みは類似していると評価できる。

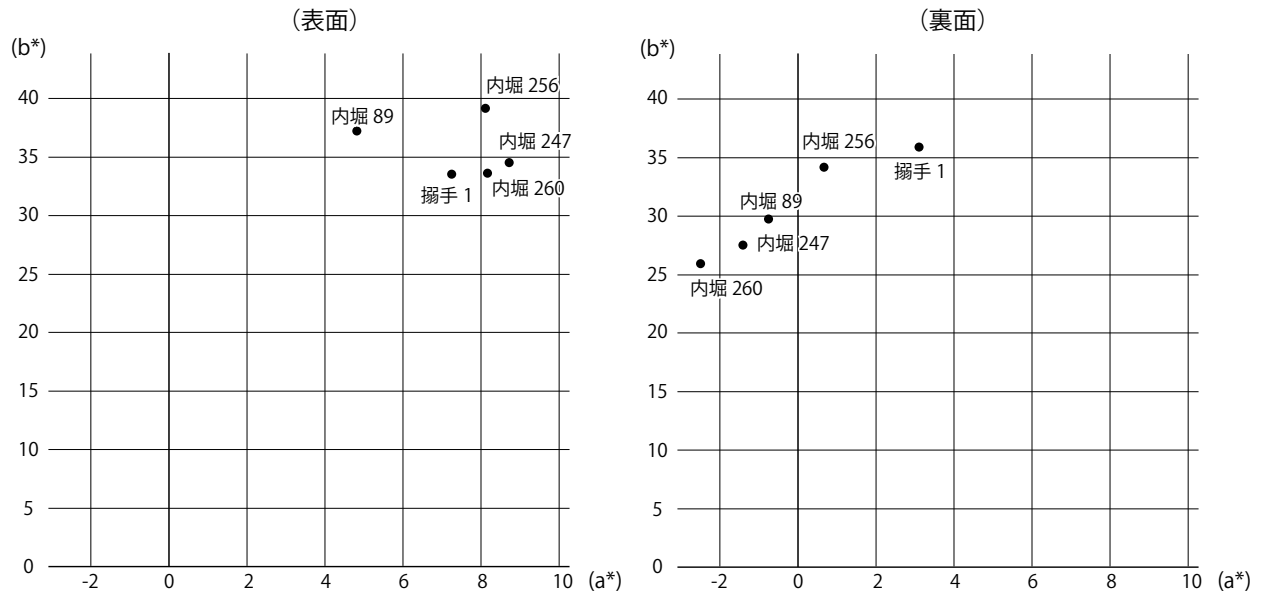


図5 内堀・搦手資料の色度分布

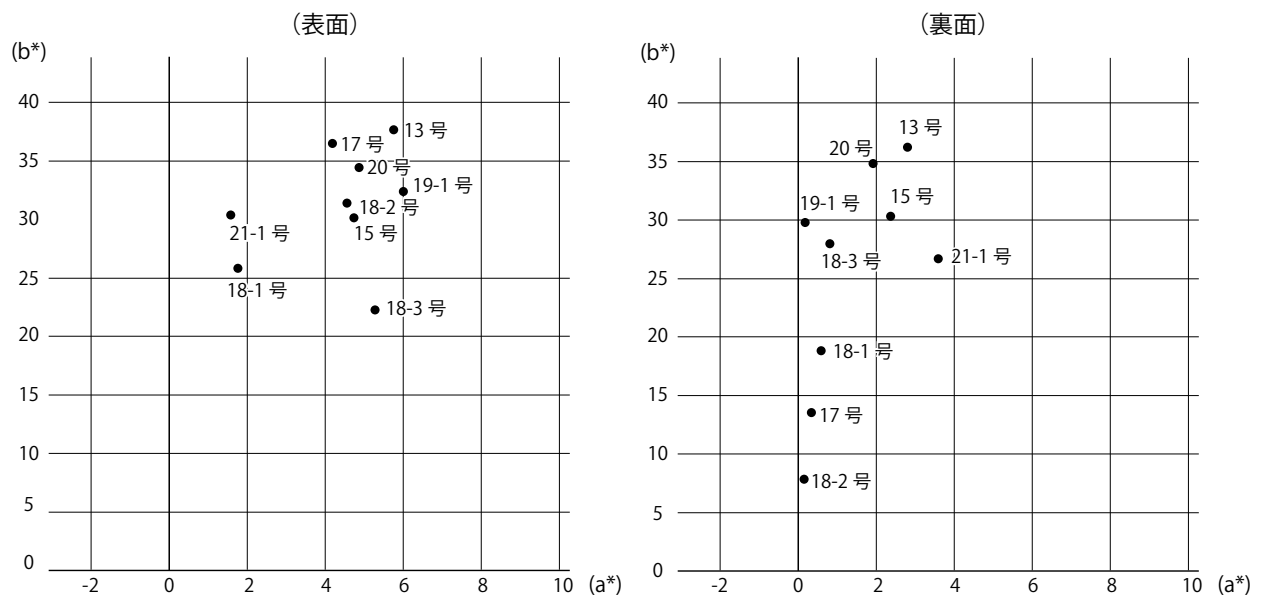


図6 金鯢関連資料の色度分布（抽出資料）

おわりに

本稿では、出土資料の観点から金薄板片を精査し、金鯢関連資料との比較検討を試みた。

測色や厚みの分析では、内堀・搦手資料と金板のみの金鯢関連資料には、共通点を見出すことができた。とくに金鯢の鱗であることが確実

な17号と、内堀・搦手資料の類似性は、出土した金薄板が金鯢に由来する可能性が高いことを示唆している。

近年、文化財資料に対して様々な非破壊方法による分析技術が進歩し、ますます多くの情報を資料から得ることが可能になってきている。

名古屋のシンボル“金鯱”の一部であった可能性があるこれらの出土金薄板片についても、さらなる分析の光が当たることを望んで止まない。

また、名古屋城の発掘調査を担当する身として、遺構を検出する過程でこれらの出土事例を今後も念頭に置きながら、微細な包含遺物まで強く注意を持って調査に臨みたい。

最後に本稿執筆にあたり、多大な協力・助言を賜った関係各位にこの場を借りてお礼を申し上げます。

参考文献

朝日美砂子 2025「名古屋城 天守金鯱 過去と今」『名古屋城調査研究センター研究紀要 第6号』名古屋城調査研究センター

大良智夫・面谷信 2011「金色の認識メカニズムの解明—照明条件に依存した金色認識の変化による考察—」『日本画像学会誌 第50巻 第6号』日本画像学会

斎藤努 2014「江戸期小判などの色揚げに関する自然科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告 第183集』国立歴史民俗博物館

酒井将史 2025「金鯱関連資料の基礎的調査」『名古屋城調査研究センター研究紀要 第6号』名古屋城調査研究センター

名古屋城総合事務所 2016『名古屋城特別展 描かれた名古屋城、写された名古屋城』名古屋城特別展開催委員会

二橋慶太郎・大西健吾ほか 2023『特別史跡名古屋城跡 本丸内堀発掘調査報告書（令和元年度・令和2年度）』名古屋市観光文化交流局 名古屋城総合事務所 名古屋城調査研究センター

三木稔 2019『オリジナルジュエリーをつくる —基礎からCAD・CAMそしてアートクレイまで—』相田化学工業

《Title》

A comparative analysis between fragments of a gold sheet excavated in Nagoya Castle and war-damaged scales of Nagoya Castle's original “*Kin-shachi*” produced in the Edo period.

《Keyword》

Nagoya Castle, Honmaru area, Thin fragments of gold sheet, *Uchibori* moat, *Karamete-umadashi*; back entrance embankment, excavated artifacts, scales of *Kin-shachi*, colorimetric analysis, thickness analysis